

史談

2009 (H21) 12・25

■ 文化財を訪ねて

直江兼続ゆかりの地巡り

9月24日、NHKの大河ドラマ「天地人」の主人公直江兼続の足跡をたどるため米沢を訪ねた。米沢市文化課長村野隆男氏の案内で、史談会の会員と一般参加者の25名が博物館や寺院、遺跡を見てまわった。

上杉博物館「伝国の杜」では兼続の企画展「天地人博2009」を見る。兼続の生涯を、当時使用された鎧兜や洛中洛外図屏風などの展示物と、テレビの「天地人」と重ねながら研修をする。

兼続が米沢に入るのは慶長3年(1598)39歳の時で、それから会津120万石を治めるために奔走する。5年の最上戦争によって30万石に減封。この痛手は藩そのものを苦しめた。



兼続の仕事の一つである松川の氾濫を防ぐ堤防「直江石堤」は総延長10kmにおよぶものであった。石積みの上を歩きながら、黒い石の一つ一つに工事に携わった人達の、町を守るための思いが込められていたような気がした。武骨でありながら集まった時の力がそこにあった。直江石堤の上流には「龍師火帝」の碑が立っていた。兼続が洪水と旱魃を防ぐことを願って建立したもので、その前で記念写真を撮った。

林泉寺では兼続、お船夫妻の墓に参拝。兼続は元和5年(1619)12月19日、江戸屋敷で病死。享年60歳であった。(江口)

■ 地名の講演を聞く

さる11月7日の午後、「あゆむ」で歴史講演会が開催されました。今年は長期にわたって、山形新聞に「地名伝説」を執筆してこられた新関昭男氏を講師にお招きし、「白鷹町の地名」についてお話を伺いました。



私たちはふだんあまりにも身近なせいか、地名のことを気に留めなくて生活していますが、逆に地名がなかったら・・・と考えると、極めて不便な生活を強いられると思われそうです。それぞれの地名にはなんらかの由来があるはずで、身のまわりの小字名にも改めて注意をしてみたいものです。荒砥の甲、乙の件もそのひとつでしょう。

■ 奥村先生、地域文化功労賞

当史談会の顧問であられる奥村幸雄先生が、このたび長年にわたる地域文化への功績を認められ、文部科学大臣賞を受賞されました。

この受賞を祝う会が12月12日に「パレス松風」で行われ、町長や町の要職の方々、史談会の会員、子どもの本研究会などが多数集まり、御親族の方と一緒にお祝いの席を囲みました。



9 小阪下の分水工

浅立地区と広野地区の境に小坂というちよつとした峠がある。諏訪堰の幹線用水路はその西側をめぐるが、ここで分水し、一方は浅立高野地区に向かう。もう一方は小坂の北側でさらに分水し、一方は広野地区へ、もう一方は東に向かい、細越の地蔵堂の脇を通り、山裾をめぐる小山沢へ向かう。



ここまで、約2時間の歩きである。さすがにやや疲れてきたので、細越地蔵堂で遅い昼食にした。

このあたりはこの地域では最上川と東山の間隔が最も広いところである。現在では耕地整理された水田が一面に広がっている。諏訪堰ができる前は、水田耕作に適しない藪であったということは想像できない。だから、ここを耕地にしたらと言うことは誰もが考えそうである。しかし、考えることと、実行することは別物である。先人の決断と実行力によって、現在の風景があることをしみじみ考えて地蔵堂に手を合わせた。

10 諏訪堰揚水機場

開堰当初は広野に水を送ることが目的だったから、このあたりで堰は終わりになっていたのだろう。しかし、現在の諏訪堰はまだまだ延びている。その流水路を追ってみた。

細越の地蔵堂から東に向かった水路は、国道287号線の旧道にぶつかって、その脇を北へ向かってすこし流れる。そして、国道を渡り、山裾にそって流れる。水路はずいぶん細くなる。



水路に沿った道はないので、国道287号線の旧道を歩きながら観察する。

ところが、突然水路を見失ってしまった。もうすぐ耳堂地区に入ろうとするところだった。脇道に入り、眺めてみると、道路を越えて、水田の中央部にある白い建物に向かって流れる水路を発見した。



この建物が諏訪堰揚水機場である。

この先、小山沢や町下地区は高いところにあるので、水をくみ上げて送るようにしている。くみ上げ用のポンプは2基あり、電気で揚水している。

ここでも水路は分岐し、一方は東の小山沢地区を目指して流れている。もう一方は西に向かい、国道287号線旧道方向へ向かう。

私は、再び、国道旧道に戻り、西に向かった水路を追うことにした。

■ 突然の大雪にご注意をー

「この正月は雪がないだろう」などと言っているうちに、このドカ雪である。それも近年にないような雪質で、電話線が切れるやら庭木が折れるやら、果ては文化財の桜の古木が枝折れしているとか。これからが冬本番、くれぐれもご用心を。